障がい者が水泳と出会い、トップパラスイマーに至るまでの軌跡

トップスポーツマネジメントコース　　研究指導教員 平田 竹男 教授
5018A324-4 八尋 大

1. 研究の背景

筆者は、2002年から当時では珍しい、企業等に属さないフリーランスのコーチとして水泳指導業を始めた。2003年に、一人のパラスイマーと出会い、その選手がアテネパラリンピックに出場した事をきっかけにパラ水泳に深く携わる事になった。水泳を長く続けてきた筆者ですら、当時はパラ水泳のルールすら知らず、障がい者に対しての指導知識はなかったものの、選手にも恵まれ2008年、2012年、2016年と4度のパラリンピックに4名の選手を送り込むことができた。パラスイマーたちは一人ひとり使える機能が違う為、前例がない泳ぎをコーチたちは本人たちにオーダーメイドしなくてはならない。そこには探求心に満ちた指導技術が必要となり、健常者を教える以上にコーチングスキルが身についたと感じている。選手とコーチで新しい泳ぎを共に作っていく作業は、パラ水泳の大きな魅力である。

本研究では、現在日本のパラ水泳をけん引してきた10名のトップパラスイマーにインタビューを行った。世界を見た彼らの経験から成功の要因を探り出し、今後のパラ水泳界をけん引する選手や指導者を育成するヒントを得るために大きく有益な情報を探る事ができると考えた。

2. 研究目的

本研究は、パラ水泳界のトリプルミッションの好循環に必要なアクションを導くため、わが国におけるトップパラスイマーの成功の軌跡を明らかにする事を目的とする。

3. 研究方法

1) 調査対象者

調査対象者は、パラリンピックに出場したことのある水泳選手(引退している元選手も含む)10 名である。

2) データ収集

対象者 1 名に対して 1 時間から 1 時間半程度の半構造化インタビューを実施した。水泳をはじめたきっかけ、パラリンピック出場前までの練習環境、パラリンピック出場を確信した出来事、これまで経験した壁は何か、それをどのように打破したのか、などを軸にインタビューをした。インタビューの内容は本人に許可を得てボイスレコーダーに記録した。

3) データ分析

録音したインタビュー内容は逐語録を作成し、それぞれがたどった幼少期から社会人までの各時期に経験した壁、困難な出来事と、ブレイクスルーにつながったアクションに注目し整理した。

4) 倫理的配慮

インタビュー対象者には、個人情報の保護、公表の方法についての説明を行い、同意を得た。また、インタビューした内容を論文にする前に対象者に確認してもらい、公表の範囲の合意を得た。

4. 研究結果

1) 対象者の背景

インタビューに協力が得られた 10 名の選手の背景を表 1 に示す。10 名のパラリンピックでの成績は、メダルを獲得した者が 8 名(男子 6 名、女子 2 名)、入賞者が 2 名(男子 1 名、女子 1 名)で、7 名が先天的障がいを持ち、3 名は後天的障がいだった。

表 1 対象者の背景

名前	始めた年齢	きっかけ	初出場したパラリンピック	出場回数	主な成績
鈴木	6 歳	親	アテネ	4大会	金1 ほか
木村敬	10 歳	親	北京	3大会	銀3、銅3
山田	3 歳	親	アテネ	4大会	銅1
中村	4 歳	親・園長	アテネ	4大会	銀1、銅1
木村潤	6歳	親	アテネ	4大会	5位入賞
秋山	3 歳	親・姉	アテネ	3大会	金1、銀1
森下	5 歳	親	リオ	1大会	6位入賞
河合	5 歳	親	バルセロナ	6大会	金5 ほか
小山	5 歳	親	北京	3大会	銀1、銅1
成田	23 歳	知人	アトランタ	5大会	金15 ほか

2) 対象者の練習環境

対象者は、年齢ごとに表2に示すように、大きく5つの時期で練習環境に変化があった。10 人中 9 人が幼少期から水泳を始めていて、表の下線の通り、パラリンピック初出場は高校生までに 10 人中5人が大学生以降では、5人が果していた。

対象者の練習の環境としては、幼少期はスイミングスクールで練習をして泳ぎの基礎を身につけて、そのまま選手コースか部活動で体力的な土台を作っていた。高校を卒業した後、より専門的な指導者を探して、公共のプールや連盟が場所提供をしている拠点など複数ヶ所で練習をする選手も増えた。また近年では、海外に拠点を移してトレーニングを積む選手が現れて、社会人になってからの練習環境の選択肢が、彼らにより開拓・拡大されている事もわかった。

表2. トップパラスイマーたちの各時期における主な練習環境

名前	幼少期	中学期	高校期	大学期	社会人
鈴木	障ｸﾗﾌﾞ	(※1)	障ｸﾗﾌﾞ	ﾊﾟｰｿﾅﾙ	海外ｸﾗﾌﾞ
木村敬	ｽｸｰﾙ	部活	部活	ｻｰｸﾙ	海外ｸﾗﾌﾞ
山田	ｽｸｰﾙ	ｽｸｰﾙ	ｽｸｰﾙ	部活	ﾊﾟｰｿﾅﾙ
中村	ｽｸｰﾙ	部活	ｽｸｰﾙ	ｽｸｰﾙ	ｽｸｰﾙ
木村潤	ｽｸｰﾙ	部活	部活	ﾊﾟｰｿﾅﾙ	ﾊﾟｰｿﾅﾙ
秋山	ｽｸｰﾙ	部活/ｽｸｰﾙ	部活/ｽｸｰﾙ	ｽｸｰﾙ	(※2)
森下	ｽｸｰﾙ	ｽｸｰﾙ	部活	ﾊﾟｰｿﾅﾙ	(※3)
河合	部活	部活	部活	ｻｰｸﾙ	自主練
小山	ｽｸｰﾙ	(※1)	(※1)	ﾊﾟｰｿﾅﾙ	ﾊﾟｰｿﾅﾙ
成田	(※1)	(※1)	(※1)	(※1)	ﾊﾟｰｿﾅﾙ

※1 未経験 ※2 引退 ※3 現学生 下線はパラ初出場をした時期

3)対象者と指導者

トップパラスイマーたちが水泳の基礎を習ったのは、障がい者指導の専門家ではなく、水泳を教えるプロであるスイミングスクールのコーチたちであった。選手たちがパラリンピックに出場するまでの指導者も、視覚障がい選手の指導者であった特別支援学校の教師を除き、それまで障がい者指導の経験がないコーチや水泳経験のない部活動の顧問もいた。大学以降になると、選手たちもより専門的な指導を求めるようになり、パーソナルコーチをつける選手も増えた。

4)対象者の大会参加状況

トップパラスイマーたち10名中7名は、幼少期から水泳の大会に参加していた。参加していた大会は健常者の大会が多く、早い時期からレース経験が豊富だった事がわかった。彼らはその経験を経て障がい者の大会に移行し、日本最高峰の大会ジャパンパラ(以下、ジャパラ)に参加した後、全員が2年以内に代表に入り、海外選手とのレースを経験していた。表3は、トップパラスイマーたちが初めて各大会に参加した年代を示した。

表3. 初めて各大会に参加した時の年代

名前	地域	ジャパラ	海外遠征	パラリンピック
鈴木	高1	高1	高1（ﾌｪｽﾋﾟｯｸｽﾕｰｽ）	高2（アテネ）
木村敬	中1	中3	中3（IBSA ユース）	高3（北京）
山田	小2	小6	小6（ﾌｪｽﾋﾟｯｸｽﾕｰｽ）	中1（アテネ）
中村	中2	高3	高3（ﾌｪｽﾋﾟｯｸ）	大2（アテネ）
木村潤	小5	高2	高2（世界選手権）	大2（アテネ）
秋山	中3	中3	高1（ﾌｪｽﾋﾟｯｸｽﾕｰｽ）	高2（アテネ）
森下	中1	中1	中2（アジアパラ）	大3（リオ）
河合	高1	高1	高2（パラリンピック）	高2（バルセロナ）
小山	高2	高3	大1（フェスピック）	大3（北京）
成田	23歳	24歳	24歳（プレパラ大会）	25歳（アトランタ）

5. 考察

1) トップパラスイマーたちの軌跡を辿り、成功要因を探ってわかった事と、日本身体障がい者水泳連盟(以下、JPSF)が行ったアンケート(2018)でわかった現状の課題にギャップがある事がわかった。

(1) 調査対象者たちは、幼少期のスイミングスクールへの入会にはほぼ障壁はなかった。高校生までにかけて、スイミングスクール以外にも部活動で健常者と共に基礎能力をつける機会があった。指導者に関しても彼らは選手コースのコーチたちや部活動の顧問、高校卒業後も個々に合わせた指導ができるコーチと出会っている。大会も幼少期から健常者の大会に頻繁に参加し、パラ水泳に移行してからトップレベル大会へ時間をかけずにステップアップしていた。

(2) 調査対象者たちは総じて「自分は運がよかった」と語っていたように、彼らには必要なタイミングで必要な人や場所、機会が供給されていた。しかしながら、アンケート(JPSF, 2018)では、練習場所の確保が困難である事、指導者がいない事、参加できる大会が少ない事が問題だと報告されていることから、これらを解決する方法の提案と実行が必要だと考える。

2) これらの課題の解決には、練習場所を提供する方法と、プログラムを提供する方法の二つにより、解決策を提案できると考える。

(1) 現実的な練習場所確保の方法は、スイミングスクールへの入会や部活動への入部、JISS などの施設利用、公共プールの一般利用や障がい者専用施設などの利用が可能である。連盟や地域主催の合宿の開催も有効利用できる。プールを借りるには利用料の支払いで可能であるが、メリットのある交換条件などで公共プールや学校または企業のプールを借りる方法を探るのも可能だと考える。

(2) プログラムの提供として考えられる内容は、チームの移籍を伴わなくてもよい練習会や合宿の開催、個別指導や選手に対しての泳法基礎知識の提供が有効だと考える。また、大会情報の提供や海外遠征や海外留学などの選手が飛躍するきっかけになるような経験を支援する活動は重要である。そして、パラリンピアンの活動や経験を伝える講演活動を支援することは、パラスイマーたちへの協力者を増やしていく為に必要な活動だといえる。

6. 結論

本研究により、対象者のこれまでの軌跡を通じて、幼少期からの健常者との運動機会、能力を引き出す指導者たちとの出会い、そして自分の能力に気づく為の早期からの大会参加が、共通して重要なポイントであった事が明らかになった。

またコーチとしては、技術指導の提供は勿論の事、選手に充実した水泳の練習ができるプール環境を整える事が最も大きな課題であることが示唆された。そして、パラ水泳界のトリプルミッションの好循環を生み出すためには、水泳での共生を理念に勝利・普及を充実させることが、その後資金拡大に繋がるきっかけになるといえよう。